

■ フォト・エッセイ ■

パキスタン北部大地震から四年

—— 隠れた被災者の存在 ——

写真・文
船尾 修
©samu Funao



震災直後の街を歩くと、瓦礫の山にさまざまなものが埋もれていた。それらのモノにはどれも悲しい記憶が刻み込まれているようだった

今でもときどき夢に見ることがある。
あれは四年前、二〇〇五年のバラコット
という街。

私はパキスタンの北部で起きた大地震の
被害の様子を取材・撮影するため、被災地
を訪れていた。パンジヤブ州の北に位置す
るバラコットは、実効支配地域アザド・カ
シミールの州都ムザフアラバードとならん
で特に大きな被害が出た場所である。日本
のマスコミを通じて流れた地震被害の第一
報は、バラコットの高校の建物が全壊し、
多数の死傷者が出たというものだった。

これまで二〇年近くパキスタンという国
と深く関わり、撮影を続けてきた私には現
地に友人・知人が多い。首都イスラマバード
の友人に国際電話を入れると、情報が錯
綜しているため詳細はわからないが、現地
はとてつもなく大きな被害を受けているの
は間違いないという。

インドとの国境紛争の地でもある被災地
アザド・カシミールはその半年前に、苦労
して取材許可証を取りインド国境まで撮影
してきたばかりの場所である。私は他の仕
事をキャンセルし、すぐさま現場に飛んだ
のだった。

半壊した民家の庭に立てられたテント。
ペシャワールに住む古い友人で医師の
ファード・カーンがボランティアで診療所
をここにつくっていた。そこへ身ざれいな
中年女性が男性ふたりに支えられながら
入ってきた。女性の目の焦点は定まらず、

バラコットの街は地震によりほぼ壊滅状態となった。建物がここまで粉々になった光景を私はこれまで見たことがなかった



震災直後、阪神・淡路大震災がそうであったように、水の供給がストップした。パキスタン軍や外国の援助団体を中心に、各地に給水タンクが設置された



地震直後に誕生した赤ん坊が、NGOが運営する医療テントで治療を受けていた

宙を睨みつけながら、何ごとかをぶつぶつと話し続けていた。男性は彼女の夫と息子だった。被災して数週間たつが、寝ているとき以外はずっとこんな調子なのだという。精神科医のファードは、「今は死者が何人、負傷者が何人と、マスクミヤや国際機関はその数ばかり口にしてはいるけど、彼女のような存在は数には入らないから」と暗い表情で話してくれたことが、強く印象に残った。

私は連日、足が棒のようになるまで、瓦礫と化した街を歩きまわった。もともと耐震性を考慮した建物は少なかったため、ほぼすべての建物は粉々の瓦礫となり、その光景はあたかも空襲を受けた焼け野原の街のようだった。

いや正確にいうなら、私は米軍による空爆直後のアフガニスタンにも入っているから、そこと比較しても、地震被災地のほうがはるかに生々しかった。瓦礫の山からはたびたび腐臭が漂ってきて、そのたびに吐き気を覚えた。

国連や世界銀行などの国際機関によると、マグニチュード七・八の直下型地震により、死者は少なくとも七万人以上、家を失った人が三五〇万人という途方もない数字が発表された。阪神・淡路大震災の死者数が約六〇〇〇人だから、その規模を想像していただけるのではないかと思う。

しかし私は取材を進めるにつれ、そのような数字にはあらわれない「隠れた被災者」



家を失った人は政府や援助団体が用意したテントで避難生活を送る。山村の家を失った人のなかにはその後2年近く、テント生活を余儀なくされた者も多かった



ムザファラバード近郊のこの小学校では授業中に地震が起き、2階建て校舎の屋根が崩落。多数の児童の死者が出た



避難テントをのぞいてみると、怪我人を含めて一族郎党がスシ詰めで暮らしていた

の存在に気づくようになった。実際に、「隠れた被災者」を暗示したファードの言葉が真実味を帯びて理解できるようになったのは、二回目以降の取材のときである。

その後二〇〇八年にかけて、都合五回、取材で現地へ入った。ファードが予言したとおり、家族を失うなどのショックで精神疾患の患者が増えている、という話は方々で聞くことができたが、関係性を証明して確認するのは難しい作業に思えた。

それよりも私になったのは、両親を亡くした子どもの存在だった。いくつかの小学校に協力してもらって、両親のうちどちらかが震災で死亡した児童の数を調べてみると、三〇人や四〇人はすぐに確認できる有様だった。広大な被災地の中でいったい何人くらいの児童が親を亡くしたのか、見当もつかない。こうした児童もまた数字には表れにくいまぎれもない「隠れた被災者」なのだ。

孤児の数の多さに愕然とした私は小さなNGOを立ち上げ(NGOウジャマー・ジャンパン)、そうした児童約八〇人に対してさやかながら就学資金の提供を行っている。それでも、焼け石に水、の感は否めない。

震災直後は世界各国から援助関係者やマスコミが殺到し、日本政府からも多額の復興資金が提供された。おかげで道路や水道などのインフラや、病院や大学などの公共施設の復興はすばやかだったと思う。バラコットにしるムザファラバードにしる、現



母親を震災で亡くした少年は、花を手向けるために毎日、真新しい墓地へ通っている



この若いお父さんは娘ふたりを震災で亡くしたため、仕事も手につかず、毎日悲嘆に暮れながら墓のそばに座り込んでいた



地震により校舎が全壊した後しばらくたって、ユニセフから贈られたテントで授業が再開された。信じられないことだが被災から4年目になってもテントの仮校舎で授業が行われている学校はかなりの数にのぼる。

在街並みを見るかぎり、四年前ここに凄惨な光景が広がっていたなんて信じられないに違いない。

しかし、一步街なかに踏み込んで、ひとりひとりと話をすると、いまだに震災の後遺症から完全には抜け出していないことがすぐわかる。特に深刻なのが、先に述べた両親を亡くした児童の存在。特に父親を亡くすと、父権の強いパキスタンという国柄ゆえ、その子が就学を継続できなくなるケースが多い。また夫を亡くした妻についても同様だ。

イスラムでは基本的に夫は「外」で仕事をし、妻は「家」のなかを守る、という役割分担になっている。だから夫を亡くした妻は、「外」の世界から遮断されてしまうことになる。極端な話、女性だけではバザールで買い物をするこすらできないのだ。生活に困り、再婚する妻も多い。こうしたイスラム特有の事情は、外国人にはなかなかわかりづらいものである。

「顔が見える援助」という言葉を最近よく聞くようになったが、援助する側の顔だけの話でなく、むしろ援助される側の顔についても十分な理解がないと、せっかくの援助も無駄なものになってしまう恐れがあるだろう。

(ふなお おさむ／写真家、

NGOウジャマー・ジャパン

<http://www.ujamaa-japan.org/>)